

## きみはいい子（1）

「きみはいい子」これは、中脇初枝さんがお書きになった小説の題名で、「サンタの来ない家」など児童虐待をテーマとした5つの短編からなっています。

「サンタの来ない家」という作品では、虐待を受けている少年とその少年と関わりながら成長していく新米教師が描かれています。

夕方5時を過ぎなければ家に入れてもらえなくても、食事も満腹に食べさせてもらえなくても、そして、サンタが家に来なくても「自分が悪い子だから」と耐える少年。そして少年はつぶやきます「どうしたら、いい子になれるのかなあ。ぼく、わからないんだ。」

この少年の素直さには、胸が締め付けられます。教師は、少年に対して「君は悪くない。」「君はいい子だ」といいながら、「自分がいったんじゃだめなんだ」ということにも気づいています。

新米教師は初めのうち、この少年の存在そのものに気づかなかったのですが、やがてこの少年が虐待されていることに気づきます。

ある時、学校の保健室で、副校長と保健の先生の立会いのもと、この少年の長袖をめくったり、膝丈の半ズボンをめくったりして虐待の跡がないか確かめるのですが、特にあざややけどの跡はありません。少年に聞くと、少年は虐待を否定します。そこで、少年のトレーナーの裾に手をかけようとした時、保健室に入って来た校長は、トレーナーをぬがすのを止めるよう指示します。「服までぬがしたことがわかると、親が怒鳴り込んでくるかもしれないのよ。あくまで、服は着たままでね。」という訳です。「でも、それじゃ、おなかとか背中とかがわからないじゃないですか」という新米教師に対して、その校長は次のようにいいます。「まあ、でも、本人がたたかれていないと言っているんだから。」

世間では虐待防止が声高に叫ばれていても、恐らくはこんなやり取りが、いろんなところで繰り返されているのではないかと思います。現実を見れば、大人たちの、責任逃れとも取れる姿勢によってどれ程多くの悲劇が繰り返されていることでしょうか。

新米教師は、この少年やクラスの子ども達を通じて大事なことに気づかされます。

「こどもは、ひとりひとり違う。一人ひとりが違う家に育ち、違う家族に見守られている。そして、学校にやってきて、同じ教室で一緒に学ぶ。一枚のTシャツだって、一本の鉛筆だって、この子のためにだれかが用意してくれた。そのひとたちの思いが、この子たち一人ひとりにつまっている。そのだれかは、昨日はその子たちにごはんを食べさせ、風呂に入れ、ふとんで寝かせ、今朝は朝ごはんを食べさせ、髪をくくったりなでつけたりして、ランドセルをしょわせ、学校に送り出してくれたのだ。そんなあたりまえのことに、ぼくはやっと気づいた。ぼくは、この思いにこたえられるのだろうか。」

この新米教師の自分への問い掛けは、とても重たいものです。一人ひとりの子どもたちを見、寄り添い、向き合えば向き合う程、現実から目を背け、逃げることなどできないはずです。

ある雨の日、校庭に出ると、まだ5時前だというのに、いつもの少年の姿はありません。砂場には、少年が昨日作った砂の島が残されたままです。

新米教師は走り出します。きっと少年は自分が来るのを待っているに違いないと。彼は、少年の家のブザーを押しますが壊れています。この家は、まるで外の世界とのつながりを持つことを拒んでいるようです。

「ぼくはダメ教師だから、クラスのこどもたちさえ救えない。……だけど、この子を救うことはできるかもしれない。今、ぼくにはできる、たったひとつのこと。」これは、新米教師が自分の殻を打ち破った瞬間かもしれません。この小説は、「ぼくはこぶしをにぎりしめ、思いっきり、扉をたたいた。」というところで終わっています。

主人公の少年の置かれている状況は、全く理不尽であり、怒りさえ感じますが、一人の教師との出会いによって、もしかしたら少しは明るい日が差し込むかもしれないという予兆を感じさせます。

また同時に、児童虐待に対して、それは問題だと批判しているだけでは解決しないという事も明らかであり、私たち大人に対して、一步踏み込む勇気を持ってと訴えているようでもあります。(塾頭 吉田 洋一)